

粕畑貝塚の サヌカイト製石器から

川合 剛

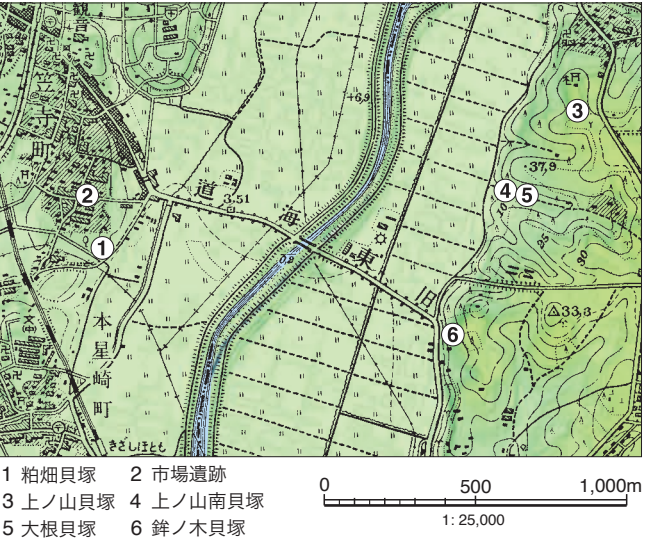
遺跡

粕畑貝塚は天白川の右岸、笠寺台地の東縁に位置する縄文時代早期の貝塚遺跡である(図版1)。貝塚周辺からは弥生土器、土師器、須恵器などが採集されていて、現在、それらの分布範囲も含めて粕畠遺跡と呼んでいる。「粕畑」は貝塚が発見された当時の地名「名古屋市南区笠寺町粕畑」に由来し、「粕畠」は1952年以降の町名「粕畠町」に由来する。

1927年に当時の鳴海町長であった野村三郎氏によって天白川左岸の上ノ山貝塚、鉾ノ木貝塚などとも発見され、1933年に小栗鉄次郎氏が紹介している(小栗1933)。1936年前後に吉田富夫氏・杉原莊介氏により数回の調査が行われた。貝塚はおよそ60mの範囲に広がり、表土のすぐ下に厚さ20～50cmのハイガイを主体とする貝層、その下に厚さ10cmほどの有機土層が部分的にあって地山に至るという。おもに貝層から出土した縄文土器はすべて早期後半の一時期のものと確認され「粕畑式土器」と命名された(吉田・杉原1937)。

石器

ここで紹介する2点の石器は野村氏による収集資料である。小栗氏によって「サヌカイト製無柄の石鏃及び同質の縦型石匙が発見されて居る」とされたものと同一石器と思われる。吉田氏氏による報告では同じ石匙が「野村三郎氏により貝層中より発見されたるもの」と記載されている。石鏃についての記述はない。



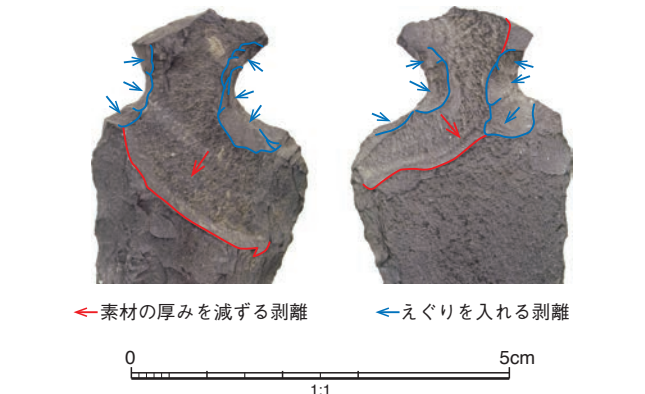
図版1 粕畑貝塚と周辺の縄文時代遺跡の位置
国土地理院発行1/25000地形図「名古屋南部」(昭和25年発行)および基盤地図情報の標高データをジオコーディング加工して使用



図版2 粕畑貝塚出土の石鏃(1)と石匙(2)
石匙の実測図は伊藤・川合1993所収の図を修正して加筆

石鏃は弓矢の矢の先に付ける石器である。石鏃のかたちには多くのバリエーションがあるが、この石鏃は柄がなく基部にえぐりが入る凹基無茎鏃である(図版2-1)。先端および片脚が欠損している。側縁の先端付近にわずかに屈曲部をもつ早期後半に多くみられるいわゆる「五角形鏃」である。側縁の屈曲部よりも基部側は内彎している。基部のえぐりは浅く、脚の端部は鋭い。片面の中央に平坦な面があり素材剥片を打ち欠いたときの剥離面(主剥離面)と思われる。石材の礫面は残っていない。現存長36.6mm、現存幅21.9mm、厚さ4.9mm、重さ2.3g。二上山産サヌカイト製。

石匙は剥片の一端につまみ状の突起を作り、ほかの縁辺に刃を作り出した石器で、つまみ状突起と刃の位置関係で縦型と横型に分けられる。この石匙はつまみ状突起の軸と刃部が平行になる縦型石匙である(図版2-2)。縦長の剥片を素材としている。素材剥片の打面(打ち欠くときに力を加える面)側につまみ状突起を作り出している。表裏両面ともに素材の厚みを減ずるための剥離を加えたあと、左右両側からえぐりを入れている(図版3)。刃部は片側の縁辺に急角度の剥離を加えて作り出している。刃部の下側に不規則な階段状の剥離痕



図版3 素材の厚みを減ずる剥離とえぐりを入れる剥離
図版2の側面の写真および実測図も参照

が観察できる。これらは使用時に生じた欠損と思われる(図4)。もう一方の縁辺には石材の礫面が残され、その状況から原石が角礫であったことがわかる。石器表面の下半にみられる不規則でやや複雑な剥離面は素材剥片の厚みを減ずるためになされたと思われるが、一部は礫面のひびから剥がれた可能性もある。長さ72.8mm、幅29.3mm、厚さ9.1mm、重さ16.4g。二上山産サヌカイト製。



図版4 粕畑貝塚出土石匙の刃部拡大
スケールの1目盛りは1mmを示す(スケール全体で20mm)

サヌカイト

サヌカイトは黒色緻密なガラス質の安山岩である。打製石器の材料として近畿・中国地方を中心に旧石器時代から弥生時代にいたるまで広く用いられている。香川県坂出市国分台や大阪府と奈良県にまたがる二上山山麓などが原産地として知られている。二上山山麓は近畿地方最大のサヌカイト原産地である。

縄文時代における二上山産サヌカイトの利用された範囲を検討した田部剛士氏は、東方への広がりが草創期では伊賀盆地周辺まで、早期前半(押型文土器の時期)になると伊勢地域まで広がり、さらに早期後半(条痕文系土器以降の時期)には知多半島南部まで拡大していると指摘している(田部2007)。伊勢地方北部に類例が少ないことから知多半島へは伊勢湾を渡る海路で流入したと推定されている。この考えにしたがえば、この2点の石器あるいは石器の原材料は知多半島を北上して笠寺台地まで移動してきたことになる。



図版5 市場遺跡出土の石匙
実測図は伊藤・川合1993所収の図に加筆

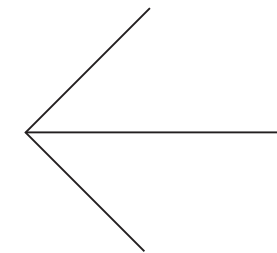
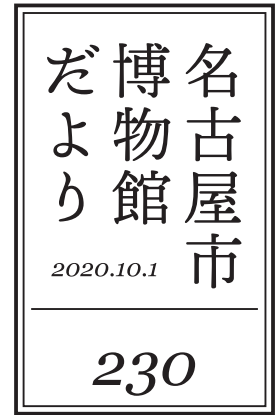
粕畑貝塚からおよそ200m北に所在する市場遺跡(名古屋南区)でも二上山産と思われるサヌカイト製の縦型石匙が出土している(図5)。粕畑貝塚の石匙と同じように一部に礫面が残る。やはり角礫が用いられている。市場遺跡の縄文時代資料は晩期前半の雷式土器を主体とするが、少量の粕畑式土器もあり、この石匙は粕畑式土器の時期と判断してよいだろう。

さらに北に位置する瀬戸市八王子遺跡でも粕畑式土器を主とする土器群とともに700点ほどの剥片石器が出土している(武部編2003)。石材はチャートと下呂石が主体であるがサヌカイトも用いられている。

断片的な資料ではあるが、これらの石器は早期後半における二上山産サヌカイトの広がりが、名古屋市南部を経て愛知県北西部までおよんでいることを示す資料といえよう。

文献

- 伊藤正人・川合剛 1993 『特別展 名古屋の縄文時代資料集』名古屋市見晴台考古資料館
小栗鉄次郎 1933 「鳴海町雷貝塚、附・附近の貝塚」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』11 愛知県
武部真木編 2003 『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第112集
田部剛士 2007 「サヌカイトの供給(二上山)」『ものづくり』縄文時代の考古学6 同成社
吉田富夫・杉原莊介 1937 「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究(1)」『考古学』8-10 東京考古学会
執筆にあたり、伊藤正人氏・上峯篤史氏・川添和暁氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。



かすはたかいづか 粕畑貝塚の サヌカイト製 石器から



古紙を含む再生紙使用



名古屋市博物館×新型コロナウイルス

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、名古屋市博物館は令和2年2月29日から5月31日までの約3か月間臨時休館しました。様々な展示や催しが中止となり、楽しみにしていたご来館にはご迷惑をおかけしました。

この間、外出を自粛されている皆様に少しでも楽しみをお届けできればと考え、博物館公式ウェブサイトやFacebookで博物館の情報を積極的に発信しました。

休館のため中止となった常設展内の企画展示「浮世絵にみる有松絞店」や「新発見 高蔵遺跡」などの内容をそれぞれ数回にわたり紹介しました。また、重要文化財「太刀 銘 行平作」などの館蔵資料の解説をはじめ、からくり人形の仕掛けがわかる動画も制作して公開し、さらに、博物館資料から塗り絵・ペーパークラフトを作るなど、在宅のひとときを楽しんでいただけるよう工夫しました。

これらは、7月18日から8月30日に開催した常設展特別企画「おまたせ！再会博物館」でまとめて展示しました。この展覧会を急ぎょ企画したのは、「せっかく展示準備をしたので見ていただきたい」という思いと、やはり博物館という場で実物と対面することで、その魅力を感じていただきたいという思いがありました。

新型コロナウイルス感染症の影響は、世界の様々な分野に影響を与え、歴史的な転換期になることが予想されます。その中で、実物と対面する場、人が集まる場としての博物館はどうなっていくのでしょうか。

変わっていく部分もあるでしょうが、長い歴史の中で疫病や自然災害、戦争などを乗り越え残されてきた博物館資料と対面する喜び、多様な文物から歴史や文化を知る知的興奮、そして、展覧会という場に身を置くことの魅力は、今後も変わらないと思います。

一方で、物理的になかなか来館いただけない皆様に博物館資料の魅力を伝えるためには、インターネットなど様々なメディアや方法(もちろんこの博物館だよりのように紙媒体も含め)を駆使しながら、それぞれの博物館資料にあわせた発信方法を開発するなど、博物館の新たな活動を模索することが必要です。

今、博物館は新型コロナウイルス感染防止の対策を行いながら運営していますが、事業等の変更をせざるを得ませんし、今後も状況によって変更になるかもしれません。皆様にはご不便おかけしますが、引き続きご理解のほどよろしくお願いいたします。

(学芸課長 瀬川貴文)

と呼ばれる大胆で斬新な形状の茶道具を好んだが、その好みはもちろん茶杓にも反映されている。

本作は、全長 17.6cm、材には樋（竹の節に枝ができることにより生じる溝）の深い古竹を用い、全体に漆拭きが施される。樋が深いために、權先（茶を掬う部分）の左右の縁が切り立っている。權先の先端に一刀切り込みが入れられているが、これは織部の茶杓の遺品によく見られる特徴である。權先は深く撓め（曲げ）られ、中節（アクセントとなる竹の節の処理）は織部茶杓に典型的な蟻腰（中節が高く、さらに節裏を削り込んだ形）である。

樋の深い竹、漆拭き、先端の一刀、中節、蟻腰といった特徴は、利休茶杓にも共通する特徴であるが、それらを継承しながらも、撓めが深い、一刀が力強く入れられているなど、各所から感じられる力強さに、織部の個性が表れている。

共筒（茶杓と同じ作者が作った筒）には、「慶十八丑九月来候　城泉州様参　古田織より」と織部による書付があり、本作は慶長 18 年（1613）織部 71 歳の最晩年時に、城和泉守昌茂（1552～1626）に贈られたものとわかる。昌茂は甲斐武田氏に仕え、武田氏滅亡ののちに徳川家康に仕えた武将である。

本作には、書状（かえづつ）が添う。書状は表千家半床庵四代 久田宗也（不及斎　1681～1744）から北村久右衛門（未詳）という人物に当てられたもので、久右衛門から預かった茶杓に新たに筒を作成して返却した旨が記されており、さらに、茶杓は織部の手製のものなので、大切に秘蔵するようにと申し添えている。替筒の表には「古織作　半庵」とあり、半庵は宗也の号であることから、書状の内容の通り、替筒は宗也の手によるものとわかる。

如春庵が本作を入手した時期、経緯は詳らかでない。彼と交流のあった数寄者・高橋箒庵（義雄　1861～1937）による『昭和茶道記』によれば、如春庵は昭和 4 年（1929）3 月 31 日の田舎家の濃茶手前で、本作を使用しているのが確認できる。森川コレクションの中には、如春庵が 16 歳の時に手に入れた本阿弥光悦（1558～1637）作の黒楽茶碗の名品「時雨」がある。光悦の茶の湯の師は織部であることから、如春庵は「時雨」に添うものとしてこの茶杓を求めたのかもしれない。

【参考文献】
 展覧会図録『茶人のまなざし　森川如春庵』名古屋市博物館、2008 年

池田瓢阿監修・MIHO MUSEUM 編『百の手すざび　近代の茶杓と数寄者往来』淡交社、2018 年

古田織部

竹茶杓 銘「城泉州様参」

藤田紗樹

本年は、中京を代表する数寄者・森川如春庵（勘一郎

1889～1980）の没後 40 年に当たる。如春庵は数多くの美術品を収集し、そのうち 188 件 211 点が生前に名古屋市に寄贈され、現在は「森川コレクション」として当館で収蔵・活用している。

今回はその中から、竹茶杓　銘「城泉州様参」を紹介したい。本作は武将茶人・古田織部（重然　1543～1615）の作になる。古田織部は千利休（宗易　1522～91）の高弟として、利休没後の茶の湯の世界に大きな影響を与えた人物である。



竹茶杓　銘「城泉州様参」　館蔵（森川コレクション）

そもそも、茶人が茶杓を自作することは、利休以前には一般的ではなく、茶杓の削り師とされる人々が茶杓を製作していた。しかし、利休が自ら茶杓を削るようになると、それに倣い、茶人自らが茶杓を製作することが定着していった。さて、織部は利休の茶の湯を継承しながら、「織部好み」

七尾天神社と土人形「亀乗り天神」

白井裕香

今からおおよそ　500年前の文亀年間（1501～1504）のこと、天神池から七つの尾をもつ霊亀が、菅原道真公の木像（天神像）を背負って現れた。霊亀は、現地にあった祠に入り、天神像を残してもとの池に去っていったという。何とも不思議なこのお話は、名古屋市東区の「七尾天神社」に伝わる由緒である。七尾天神社では、このできごと以来、七つの尾の霊亀を彫り、それを台座にして天神像を乗せ、御祭神としてお祀りしている。今回は、この言い伝えを題材として作られた土人形「亀乗り天神」(図版1)を紹介したい。

七尾天神社は名古屋城の東、東区白壁に位置する。かつてその場所周辺は、尾張徳川家の付家老であり、代々犬山城主を務めた成瀬家の中屋敷と、その家中の屋敷が広がる地域であった。七尾天神社は明治初年の神仏分離以前「亀尾山永正寺」と称し、成瀬家の祈願所となっていたようだ。亀尾山永正寺は永正年中（1504～1521）に創建された寺院で、不動明王の木像を御本尊としていたが、亀乗り天神の木像も祀られていた。「亀尾」の名は冒頭の言い伝えとの縁を物語っている。



図版1　土人形　亀乗り天神　館蔵

七尾天神社は名古屋城の東、東区白壁に位置する。かつてその場所周辺は、尾張徳川家の付家老であり、代々犬山城主を務めた成瀬家の中屋敷と、その家中の屋敷が広がる地域であった。七尾天神社は明治初年の神仏分離以前「亀尾山永正寺」と称し、成瀬家の祈願所となっていたようだ。亀尾山永正寺は永正年中（1504～1521）に創建された寺院で、不動明王の木像を御本尊としていたが、亀乗り天神の木像も祀られていた。「亀尾」の名は冒頭の言い伝えとの縁を物語っている。

また、境内は熱田台地の北西端にあたる崖上に建てられており、その背後には、一面の田園と山々を眼下に見渡せる景色が広がっていたといわれ、尾張名陽五景のひとつに数えられたという。江戸時代後期に刊行された『尾張名所図会』には、そのような眺めを背景に描いた七尾天神の様子や、霊亀が天神様を背負い崖下から登ってきたと思われる神秘的な一面面も描かれている(図版2・3)。さらに『尾張名陽図会』には、「御正体出現」として石の上に天神像を置いて去っていく様子が描かれているが、このとき石のまわりを七回まわって去ったともいわれている(図版4)。

このように二つをくらべてみると、霊亀が現れた場面は少しずつ異なっているが、いずれも「亀乗り天神」の題材となった由来が描かれ、興味深いものである。では、土人形「亀乗り天神」をみてみよう。これは、名古屋土人形最後の作者であった野田末吉氏（1902～1989）によって作られた土人形である。野田氏は明治15年（1882）頃から土人形の製作を始めた父重



図版4　七尾天神 御正体出現（『尾張名陽図会』5巻より）　館蔵



図版3　七尾天神 出現の図（『尾張名所図会』前編2巻より）　館蔵



図版2　七尾天神（『尾張名所図会』前編2巻より）　館蔵

野田氏が製作した土人形の多くは、様々な色を使って彩色されているが、この亀乗り天神は、一色で全体が覆われており、一風変わっている。郷土玩具に関する諸本では、「黄土色」や「無彩色」と表現されているものもある。なぜこのような色をしているのか、七尾天神社の宮司である服部司郎氏にお話を伺う機会があり、答えを知ることができた。

七尾天神社は昭和6年（1931）に御屋根替えを行い、御本殿に使われていた鰹木の一部材で亀乗り天神を100体謹刻し、頒布したという。それが好評であったため、近隣（現在の東区東横付近）に住んでいた野田氏に製作を依頼した。野田氏は、着色のない木製の亀乗り天神に倣い製作したことから、このようなシンプルな色合いになったということである。

お話を伺った際に木製の亀乗り天神を見せていただいたところ、野田氏は色だけでなく、亀と天神様の形や細部に関しても木製の亀乗り天神をもとにして忠実に表現していたことがわかった。しかし、土人形には特に丸みのあるなめらかな縁取りが丁寧に施されているという特徴がある。そのフォルムから感じるやさしい印象と、木製の彫刻にあるような力強さを併せ持った姿は、不易流行を感じさせるものであり、野田氏の感性と技術力を垣間見ることができる。

土人形「亀乗り天神」は、七尾天神社の由緒と歴史を伝えるものとして貴重な資料であるとともに、作者の工夫が随所にみられる、名古屋土人形を代表する傑作のひとつとして後世に残していくべき作品である。

野田氏が制作した亀乗り天神は、御屋根替えの翌年、3月25日の天神祭の際に、70体授与された。その後、戦争を経て復活し、愛好家の要望により彩色されたものも作られている。野田氏が亡くなられてからは、大阪の神具店が製作していたが、現在は四日市の三代藤井陶楽氏が製作した土鈴の亀乗り天神が授与されている。

【参考文献】
 江崎公朗　1967年『山吹の歩み』同刊行会
 木村泰夫　2000年『天神さん人形 雷、天候、農耕、学問、芸能、――庶民の祈り』日貿出版社
 中島芳美　1986年『名古屋土人形』

＊土人形「亀乗り天神」は常設展テーマ16「土人形の世界」（10月28日～12月6日）に展示する予定です。